

原 著

女性慢性呼吸不全患者の家事・家庭内労働における在宅酸素療法の問題点

石田 安代¹⁾, 武内浩一郎²⁾, 森川 哲行²⁾菊岡健太郎²⁾, 打越 暁²⁾¹⁾新潟労災病院内科, ²⁾横浜労災病院呼吸器科

(平成 18 年 9 月 26 日受付)

要旨：目的：これまで我々の研究も含め在宅酸素療法（以下，HOT）を行っている慢性呼吸不全患者（以下，HOT 患者）の就労上の問題点に関する研究は増えつつある。しかし、これまでの HOT と就労に関する研究で、女性という観点、女性の家事労働という観点に目を向けたものは皆無である。高齢化社会への急激な進行、女性の喫煙率の上昇を踏まえ女性 HOT 患者の増加が予測される。また核家族化という社会背景を考えると、女性 HOT 患者の家事労働に関する研究は重要であると考えられる。今回、女性 HOT 患者の家事労働における問題点をアンケート調査をもとに検討した。

対象，方法：2003 年 3 月時点での横浜労災病院呼吸器科における HOT 患者 240 名中、女性 62 名（26%）に対して家事労働に関するアンケート調査を行い、48 名の回答（回収率 77%）を得た。

結果：年齢は 50 歳から 89 歳（平均 73 歳）、HOT 実施期間は平均 3.4 年であった。また、一人暮らしは 7 人、平均同居家族数は患者本人を含め 3.4 人であった。家事労働に関しては原則自分ですると答えた人は、調理と洗濯ではそれぞれ 39%、48% であったのに対して、掃除と買い物は 19%、11% であった。家事に際し酸素吸入を常時する人は、調理、洗濯、買い物においては 50% 前後であったのに対し、掃除においては 42% とやや低い傾向を示した。家事をする際酸素の使用が容易でないと答えた人は 24 名（50%）に認め、酸素器具の軽量化、カーットの改善、部屋の構造、道路、商店内の通路における段差の問題などが指摘された。

結語：女性 HOT 患者の家事労働における様々な問題点がアンケート調査よりうきほりにされた。女性 HOT 患者の家事労働の問題はより一層重要性を増すと考えられ、酸素供給装置の改良、生活環境の整備、患者に対する幅広い情報の提供が急務と考えられた。

(日職災医誌, 55:29-32, 2007)

—キーワード—

女性, 家事労働, 在宅酸素療法

緒 言

本邦における慢性呼吸不全患者への在宅酸素療法（以下，HOT）の普及は著しく、2001 年現在 7 万人以上と推定される¹⁾。これまで HOT を行っている慢性呼吸不全患者（以下，HOT 患者）の就労上の問題に関する研究は、我々の報告を含め散見されるが^{2)~4)}、女性という観点、女性の家事労働に目を向けたものは我々の検索し得た範囲ではない。高齢化社会への急激な進行、女性の喫煙率の上昇に伴い女性 HOT 患者の増加が予測される。また、核家族化という社会背景を踏まえると女性 HOT 患者の家

事労働に関する研究は重要と考える。

今回我々は、横浜労災病院呼吸器科において女性 HOT 患者に対してアンケート調査を実施し、家事労働における HOT の問題点を検討したので報告する。

対象と方法

2003 年 3 月時点当院で HOT を施行している患者は 240 名である。この内女性患者は 62 名（26%）を占めていた。この女性 HOT 患者 62 名にアンケート調査票を郵送し、回答を得た 48 名（回収率 77%）に対して検討を加えた。

アンケートには、HOT 導入からの期間、酸素吸入量、酸素供給源、同居家族数、家事労働（調理、洗濯、掃除、買い物）を自分で行うか、またその時の酸素吸入状況と

自覚症状の有無，家事労働をする際酸素吸入が容易でない理由，望まれる改善点，等を記入してもらった。

結果 (表 1)

年齢分布は 50 歳から 89 歳であり，平均年齢は 73 歳であった。また基礎疾患は，肺気腫 13 名，間質性肺炎 13 名，陳旧性肺結核 12 名，肺癌 4 名，気管支拡張症 3 名，びまん性汎細気管支炎 2 名，気管支喘息 2 名，その他 13 名であった。

HOT の実施期間は 2 カ月から 13 年であり，平均 3.4 年であった。同居家族は，一人暮らしが 7 人，家族と同居している人が 41 人，平均同居家族数は 3.4 人であった。

表 1 アンケート回答者 48 名の背景

・年齢	50～89 歳
・平均年齢	73 歳
・母集団の基礎疾患	肺気腫 13 名，間質性肺炎 13 名，陳旧性肺結核 12 名，肺癌 4 名，気管支拡張症 3 名，DPB2 名，気管支喘息 2 名，その他 13 名
・HOT 実施期間	平均 3.4 年
・同居家族数	
一人暮らし	7 人
家族と同居	41 人
平均同居家族数	3.4 人 (本人含む)
・家事・家庭内労働以外に仕事を有する人	2 人

た。

家事労働に関しては，調理を原則自分でする人は 39%，時々する人と合わせると 62% であり，その内酸素を常時使用する人は 55% であった(図 1)。また，洗濯を原則自分でする人は 48%，時々する人と合わせると 65% であり，その内酸素を常時使用する人は 48% であった(図 2)。

しかしながら，掃除を原則自分でする人は 19% と低く，時々する人と合わせても 51% に留まった。その内酸素を常時使用する人は 42% であった(図 3)。また買い物に原則自分で行く人は 11% と低く，時々行く人と合わせると 62% であった。その内酸素を常時使用する人は 57% であった(図 4)。

次に，家庭内で家事をする際，酸素の使用が容易でないと感じる人は 24 名(50%)であり，その理由としては，チューブや酸素器具が家事をするのに邪魔になる，チューブの長さが十分でない，部屋の中の段差が邪魔になる，調理をする際火の危険を感じる，などが挙げられた(表 2)。

買い物に行くのに，酸素の使用が容易でないと感じる人は 28 名(58%)に認められ，その理由としては，ボンベが重すぎる，ボンベがあると買った物を持ってない，カートが道や店の中でうまく引っ張れない，ボンベの容量が

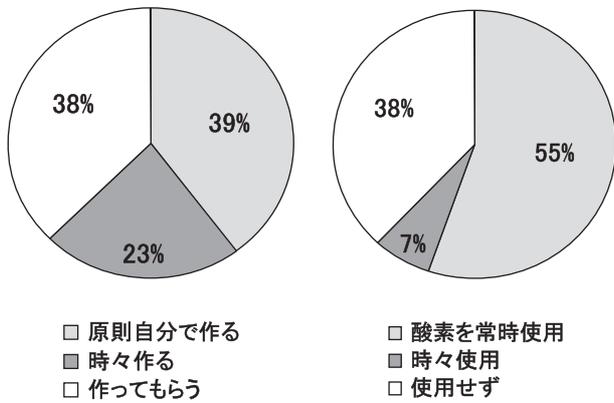


図 1 調理に関して

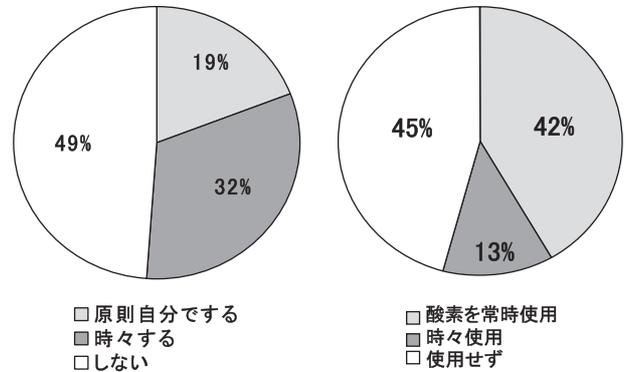


図 3 掃除に関して

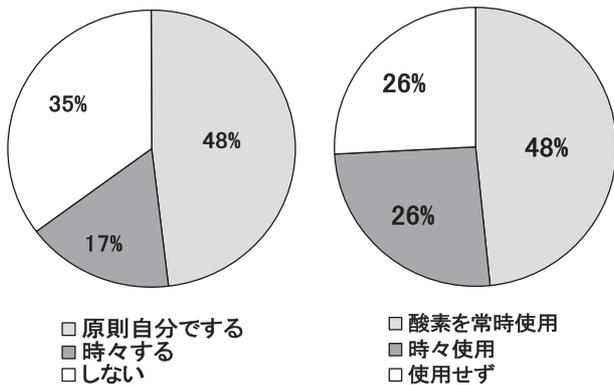


図 2 洗濯に関して

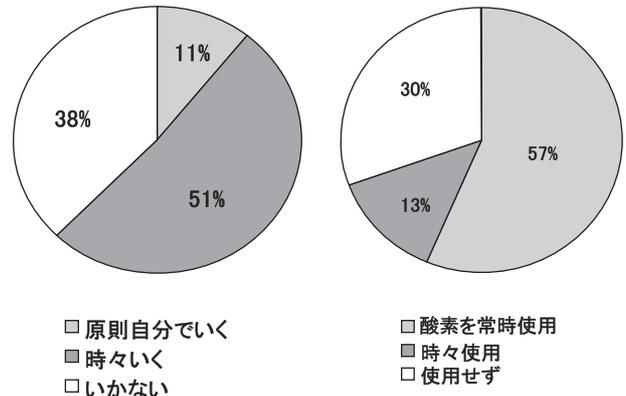


図 4 買い物に関して

表2 家庭内家事における酸素吸入の問題点

<ul style="list-style-type: none"> ・家庭内で家事（炊事、洗濯、掃除）をする際、酸素の使用が容易でないと感じる人 48人中24人（50%） ・容易でないと感じる理由 チューブや酸素器具が家事をするのに邪魔 チューブの長さが十分でない 部屋の中の段差が邪魔 調理をする際、火の危険を感じる
--

表4 家事労働における酸素吸入で希望すること

<ul style="list-style-type: none"> ・酸素ポンペをより軽量化して欲しい ・酸素ポンペの持続時間を延ばして欲しい ・酸素カートや鼻カニューラを目立たないようにして欲しい ・酸素ポンペ、酸素濃縮装置を小型化して、身体に付けられるようにして欲しい ・酸素カートをより使いやすく、物を収納できるようにして欲しい ・酸素ポンペを入れるバッグを改良して欲しい ・買い物をする商店の中の通路を広げて欲しい ・買い物をする商店の中の段差をなくして欲しい

表3 買い物における酸素吸入の問題点

<ul style="list-style-type: none"> ・買い物に行くのに、酸素の使用が容易でないと感じる人 48人中28人（58%） ・容易でないと感じる理由 ポンペが重すぎる ポンペがあると買った物を持ってない ポンペのカートが道や店の中でうまく引けない ポンペの容量が少なく、買い物の時間が足りない

少なく、買い物の時間が足りない、などが挙げられた(表3)。

家事労働における酸素吸入で希望することとして、酸素ポンペをより軽量化して欲しい、持続時間を延ばして欲しい、カートや鼻カニューラを目立たないようにして欲しい、酸素ポンペや酸素濃縮装置を小型化して身体に付けられるようにして欲しい、カートをより使いやすく、物を収納できるようにして欲しい、商店の通路や段差を改善して欲しい、などが挙げられた(表4)。

考 察

HOT患者は、宮本らによれば、現在7万人以上と推定され増加傾向をたどっている¹⁾。男女比は、1993年度の厚生省特定疾患呼吸不全調査研究班の全国調査⁵⁾では、男性70.3%、女性29.7%と報告されている。今回の我々の調査でも女性は26%であった。HOTと就労に関する検討は少なくなく、宮本らはHOT実施患者の内、就業可能年齢者は12%で、その多くは仕事を続けることが困難であると報告している。その理由として現行の健康保険制度では酸素濃縮装置を職場と自宅の両方に設置することができず、同調器を備えた液体酸素の普及が鍵と述べている¹⁾。我々は、当院におけるHOT施行患者208名中14名(7%)が就労していること、酸素供給装置の問題に加え、職場のHOT使用における無理解などの問題を指摘している^{3) 4)}。

家事労働に関するまとまった研究は極めて少ないと思われる。石川らは、北海道内441施設を対象とした調査で、18歳～60歳を就業年齢と規定し、主婦業と答えた10人の内、HOT実施後に50%が家事を断念ないし減量したことを報告している²⁾。沢木らは、自科で実施するHOT患者41名の検討で、導入前に買い物に行っていた

人19名が導入後に16名に減少したことを指摘している⁶⁾。

今回、我々の調査においては、家事労働を調理、洗濯、掃除、買い物の4つに分けて、酸素の使用状況と、問題点に関して調査した。その結果、掃除や買い物は、調理、洗濯に比べ、より労作としてきつく、ことに掃除における体を上げ下げする動作がきついと意見があり、そのため掃除、買い物において自分で行く人が少ないと考えられた。又、掃除において酸素吸入者が少ないのは、掃除を自分でする人が呼吸不全が軽い人に限られている可能性がある一方、掃除において酸素チューブが他の家事に比べてより邪魔になりやすい可能性が考えられた。調理における火事の危険性に関しても、チューブの体へのかけかた、電気調理器の使用など様々な工夫が望まれ、一口に家事労働といっても、その内容は多彩であり、より詳細な検討と、それに根ざしたきめ細かい指導が望まれる。

家事労働における酸素供給器具に関する検討においても、酸素器具の軽量化、カートの改善を求める声が多く、さらには、部屋の構造、道路や商店内の通路・段差の問題など、住宅業界や行政への働きかけが重要と考えられる。

現在、高齢化社会、核家族化が急速に進む中、一人暮らし、あるいは老夫婦だけで生活している慢性呼吸不全患者が増多しており、在宅酸素を使用する患者の家事労働の問題はより一層重要性を増すと考えられ、酸素供給装置の改良、生活環境の整備、医療者側の機器に対する認識の向上、患者に対する幅広い情報の提供が急務と考える。

文 献

- 1) 宮本顕二, 笠原敏史:【在宅酸素療法の現状は】今どこまで受け入れられているか—現状と社会復帰—. 日本胸部臨床 59:735—740, 2000.
- 2) 石川 朗, 望月 藍:在宅酸素療法施行者の就業状況に関する調査. 日本呼吸管理学会誌 11:275—280, 2001.
- 3) 山里将也, 武内浩一郎, 森川哲行, 他:在宅酸素療法を施行する労働者の就労上の問題点. 日本呼吸器学会雑誌 39:269, 2001.
- 4) 石田安代, 武内浩一郎, 森川哲行, 他:在宅酸素療法にお

ける勤労者の就労上の問題点. 日本職業・災害医学会誌
50:183, 2002.

- 5) 齊藤俊一, 宮本顕二, 西村正治, 他: 在宅酸素療法実施症
例の全国調査結果について・平成7年度呼吸不全調査研究
報告書. pp 5—9, 1995.
- 6) 沢木亜有子, 佐々木千祐, 久野福美: 外出状況と外出を左
右する要因との関係について—在宅酸素療法導入患者の実
態調査から—. 袋井市立袋井市民病院研究誌 11:61—66,
2002.

(原稿受付 平成 18. 9. 26)

別刷請求先 〒942-8502 新潟県上越市東雲町 1—7—12
新潟労災病院内科
石田 安代

Reprint request :

Yasuyo Ishida
Department of Internal Medicine, Niigata Rosai Hospital,
Toun-cho 1-7-12 Joetsu city Niigata prefecture 942-8502,
Japan

RESEARCH INTO THE HOME OXYGEN THERAPY IN THE WOMAN HOUSE WORK LABOR

Yasuyo ISHIDA¹⁾, Koichiro TAKEUCHI²⁾, Tetuyuki MORIKAWA²⁾,
Kentarou KIKUOKA²⁾ and Akira UCHIKOSHI²⁾

¹⁾Department of Internal Medicine, Niigata Rosai Hospital

²⁾Department of Respiratory Medicine, Yokohama Rosai Hospital

Research on the problem of the home oxygen therapy in the work increases. But the research that it stood up in the viewpoint of the woman's housework labor was rare. In this country aging progresses rapidly and a woman's smoking rate is increased. Therefore, it is predicted that the patients of the woman who will receive a home oxygen therapy will increase in the future and the number of family members decreases rapidly. We think that the research of the home oxygen therapy in the woman housework labor is very important. This time, we examined the problem about the home oxygen therapy in the woman housework labor by the questionnaire survey. The patients who receive a home oxygen therapy in Yokohama Rosai Hospital were 240 people at present in March, 2003. 62 out of 240 were woman. A questionnaire survey about the housework labor was done to these women and 48 responded. As for the contestant's age, the average age was 73 years old from 50 to 89. The period of home oxygen therapy was an average 3.4 years. The people living on their own were seven. The number of family who lives together was the average of 3.4 people including the patient. The person who answered that cooking was done by herself was 39%. The person who answered that cloth washing was done by herself was 48%. The person who answered that house cleaning was done by herself was 19%. The person who answered that shopping was done by herself was 11%. The person who answered that oxygen was inhaled always in cooking, cloth washing, or shopping was about 50%. But the person who answered that oxygen was inhaled in house cleaning was 42%. The person who answered that it wasn't easy to inhale oxygen in the housework labor was 50%. There were many requests to lighten the oxygen equipments and to improve the cart which carries the oxygen tank. Also, there were many requests to remove the stairs of the house, the street, and passages in the store. Various problems about home oxygen therapy in the housework labor of the woman were clear by this questionnaire survey. We think that the improvement of the oxygen equipment, environment, and supplying information to the patients are urgent subjects.
